

中学生における家族関係がいじめ行動に及ぼす影響

—家庭での過剰適応傾向に着目して—

14009PCM 早崎 しほ

I. 問題と目的

近年、いじめを苦に自殺をする小中高生がニュースで取り上げられ問題視されている。その中でも中学生の時期はいじめの好発期となっており、いじめが不登校のきっかけとなっていることも少なくない。中学生での心的適応や学校適応については家族関係が大きな影響を与えていることが示されている(増田他, 2004)。また現在では、過剰適応傾向のある子どもの心的苦痛についても触れられるようになってきている(大河原, 2012)。いじめ加害行動と過剰適応的な行動は、本来正反対の行為であると考えられる。しかしこの過剰適応傾向が家庭内で見られる場合には抑うつ感が高まり、抑うつ的な感情やストレスが学校でのいじめ加害行動に影響することが考えられる。そこで本研究では家族との関係性、その中でも特に家庭での過剰適応傾向に焦点を当てて、いじめ加害行動との関連を検討することでいじめ加害行動を起こしやすい生徒の家族関係の特徴を探ることを目的とする。

II. 研究 1

1. 目的

質問紙調査によって、家庭での過剰適応傾向が、抑うつ感および攻撃行動、いじめ加害行動にどのような影響を及ぼすのかについて、「家庭での過剰適応傾向が高い者は抑うつ感が高くなる(仮説 1)」、「抑うつ感の高い者は攻撃行動やいじめ加害体験が多くなる(仮説 2)」、「家庭での過剰適応傾向の高い者は攻撃行動やいじめ加害体験が多くなる(仮説 3)」を仮説としてこれらを検討することを目的とする。

2. 方法

調査対象者：愛知県内の公立 A 中学校に通う中学 1 年生 297 名を対象に行われた。

手続き：2015 年 7 月 10 日～17 日に行われた。授業時間内に教室で各クラスの担任教諭から質

問紙を配布し、回答した後に配布日から 1 週間以内に回収した。回収率は 45%であった。また有効データ数は 109 名(男子 49 名, 女子 60 名)であった。

調査の内容：質問紙は、フェイスシート、家庭での過剰適応尺度、攻撃行動の尺度、いじめの加害体験に関する質問、SDS (自己評価式抑うつ尺度)、動的家族画で構成された。

3. 結果と考察

各尺度の因子分析の結果、家庭での過剰適応尺度は 2 因子、SDS は 1 因子、攻撃行動の尺度は 2 因子、いじめ加害体験に関する質問は 1 因子が抽出された。各下位尺度間の関連を見るため、強制投入法による重回帰分析を行った。重回帰分析の結果のパス図を図 1 に示す。その結果、仮説 2 は支持され、仮説 1 と仮説 3 は部分的に支持された。家庭内での自己抑制傾向が高い者は、抑うつ感情が高まり、攻撃行動やいじめ加害行為を引き起こしやすいことが示され、他の家族成員から向けられる期待に沿う努力は、抑うつ感および攻撃行動、いじめ加害体験に影響を示さなかった。このことから、家庭での過剰適応傾向については、その内的側面である「自己抑制」と、外的側面である「期待に沿う努力」とに分かれ、それぞれ異なった意味と影響力を持っていると考えられる。

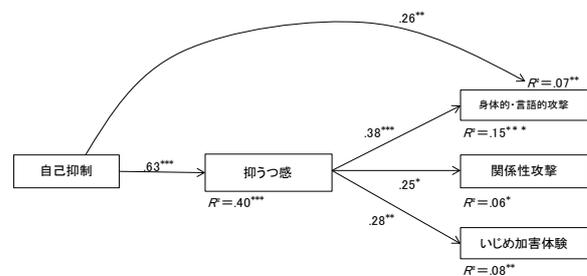


図 1. 家庭での過剰適応傾向と抑うつ感、攻撃行動、いじめ加害体験の関連

注) * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

Ⅲ. 研究 2

1. 目的

研究 1 では、家庭での過剰適応傾向の内的側面である自己抑制が抑うつ感に影響を与え、抑うつ感の高さが攻撃行動およびいじめ加害体験に影響を与えることが示唆された。研究 1 は家庭内での過剰適応傾向のみに焦点を当てたが、その他の家族関係も抑うつ感や攻撃行動、いじめ加害体験と関連がみられるのではないだろうか。そこで、動的家族画 (Kinetic Family Drawing) を用いて、家族関係を多面的に把握することで、それらの関係性が中学生の抑うつ感や攻撃行動、いじめ加害体験にどのように関連しているのかを検討する。

2. 方法

調査対象者：愛知県内の公立 A 中学校に通う中学 1 年生に対して研究 1 と同時に実施し、そのうち、描画の回答が得られた男子 32 名、女子 35 名の計 67 名。

手続きと調査内容：研究 1 と同様。

3. 結果と考察

各分析項目において、性別による分布の差があるかどうかを確認するために、描画の質的変数では 1 つのセルの数が不十分なものはフィッシャーの直接確率計算法で検定を行い、それ以外は χ^2 検定を行った。量的変数では一元配置分散分析(多重比較は Tukey の HSD 法)、 t 検定を行った。その結果、性別による描画特徴が明らかになった。また描画の各分析項目と、家庭での過剰適応傾向、抑うつ感、攻撃行動、いじめ加害体験との関連を調べるために、独立変数がカテゴリ変数の場合は一元配置分散分析、 t 検定を行い、量的変数の場合は Pearson の積率相関係数を算出した。その結果、自己像の表情が描かれていない方がポジティブな表情よりも、また自己像が後ろ向きの方が、正面を向いているよりもいじめ加害体験が多い傾向にあることがわかった。また「高いところへ上がっている人物像」を描く人は、いじめ加害体験が多い傾向にあることも示され、家族の中での支配力や力関係を感じている人は、その家族関係を友人に投影することで、いじめ加害行動を起こしや

すいといえる。また自己像と父親像の距離を遠くに描く人ほど、家庭での自己抑制が強く関係性攻撃も高いことがわかった。関係性攻撃の高い子どもは、社会的な適応にも困難さを持っていることがうかがえ(濱口・渡辺・臼倉, 2015)、そのことは父親に対する認識や父親との関わり方に影響を受けているとも考えられる。

Ⅳ. まとめと今後の課題

研究 1 から、家庭での過剰適応傾向である自己抑制が高い者は、抑うつ感が高くなり、攻撃行動やいじめ加害体験が多くなることが分かった。期待に沿う努力はどの尺度にも影響を与えないことが示された。しかし、他者の要求に応える努力が維持できなくなった状態がバーンアウトであるという指摘もあるため(宗像, 1993)、現在は問題が見られない者でも、注意してみいく必要があると考えられる。また研究 2 からは、ポジティブな表情の自己像が描かれている者はいじめ加害行動が少ないこと、家庭の中で支配力や力関係を感じている者は、いじめ加害体験が多くなることが示された。さらに、家庭での自己抑制と関係性攻撃の強さには、父親との関係が影響していることも示唆された。

本研究では、いじめ加害者の心理的特徴について調査を行ったが、森田他(1999)は、いじめられたことがあり、いじめたこともあるという子どもが多いことを示しており、いじめ加害者の心理的特徴や背景といじめ被害者のそれらには重なる部分が見られる可能性も考えられる。このように中学生におけるいじめは複雑であることが推測されるため、今後は現代の中学生のいじめの内容や形式について把握するための研究も必要であると思われる。また、過剰適応傾向にある子どもたちの、適応感に覆い隠されたストレスがどのような形で顕在化し、子どもの心身の適応がどのように変化していくか、縦断的な研究を進めていくことで、明らかにすることが今後の課題であると思われる。また、今回は描画特徴のみで家族関係の特性を見ていたため、今後は描画以外にも生育歴や各家族成員へのイメージといった情報を集めて検討していくことが必要となるだろう。